

中村耕作 提出 学位申請論文（課程博士）

『縄文土器の象徴性とカテゴリ認識』 審査要旨

論文の要旨

本論文は、「縄文土器の象徴性とカテゴリ認識」について考究するもので、序章、第Ⅰ部方法論、第Ⅱ部カテゴリ認識の形成・展開過程、第Ⅲ部縄文土器に表現された象徴性、終章から構成される。

序章で検討課題を概括し、議論の進め方を示す。第1章土器のカテゴリ認識と儀礼行為をめぐる方法論ではこれまでの研究を概観しながら、カテゴリ認識すなわち当時の人々の分類観念研究が「モノと心の考古学」を具体的に推進する有効性を明らかにし、これまでの形態機能非連関型の祭祀専用品に対する偏向から脱却して、形態機能連関型の日常道具の儀礼的利用の研究を展望する。そのために、まず自身の立ち位置として、大場磐雄の神道考古学および折口信夫の古代学そして國學院大學21世紀COEプログラム・伝統文化リサーチセンターの諸研究を研究史上に正しく位置づける。次いで、縄文土器研究の先行研究を俎上に乗せて、特に土器形式・型式を儀礼行為という限定されたコンテクストの中でのあり方を検討する方針を導き出す。第2章縄文土器の形式と儀礼での利用では、まず形式のバリエーションと形式分化を概観しながら、実用よりも飾りの要素が強い“派生器種”の歴史的意義を探る。葬送儀礼については、縄文土器の出土状況から土器被覆葬、土器副葬、墓上供献、土器棺の4つのパターンに分類する。そ

の認定方法を論じ、それぞれの特色と意味を明らかにし、草創期・早期から前期、中期を経て後期、晩期にいたる変遷を論ずる。また住居廃絶儀礼について各時期の具体例を採り上げて、土器の選択性を指摘しながら問題点を探る。また土器形式の構成を葬送儀礼と比較検討して異同を論ずる。

第Ⅱ部カテゴリ認識の形成・展開過程は、第Ⅰ部の概観と問題点の整理を踏まえての具体的なケーススタディである。まず第3章浅鉢の出現と儀礼行為において土器のカテゴリ認識の定着過程を検討する。縄文文化の進捗の中で前期における環状集落の出現や土器様式自体の変化・文様の変化、石器の流通にみられる画期を指摘するが、浅鉢はその画期に新たに現われる歴史的現象であり、墓坑と廃絶住居に関係することを明らかにする。検討に当っては具体的事例を網羅的に集成し、墓坑埋納土器自体の分析から墓域の中の浅鉢類について、深鉢との関係、土器片被覆葬との関係、石製装身具との関係について注目する。一方、住居床面出土の浅鉢についても前期各段階の様相を通観するとともに地域差を明らかにする。こうした事実を踏まえて、儀礼行為に用いられる土器形式のカテゴリ認識の形成過程の分析へと進むに当たり、時代相としての住居数の増減の実際において東京都、山梨県、群馬県における地域的差異との相関を指摘する。そして儀礼にかかわる土器形式のカテゴリ認識には小杉康が提起する“威信財・交換財”という概念を重ねて理解する。

第4章釣手土器の発生と展開では、中期の釣手土器を取り上げ、カテゴリの継承と変容の問題にアプローチを試みる。まず釣手土器の特

殊性について中期中葉から中期末にいたる所属時期、動向、分布と地域性を明らかにする。その出現については、夙に鳥居龍蔵が指摘した、「顔面把手の顔を打ち欠いたような形」の仮説を支持して、顔面把手付土器（頭部+胴部（器体））→顔面把手の独立（頭部）→顔面部の破壊（頭部-顔面部）→釣手土器（頭部-顔面部）→顔面付釣手土器（頭部+胴部（器体））→顔面部破壊（頭部-顔面部）+胴部（器体）となる過程を復元する。つまり、ここに通底する觀念に頭部の顕在化・独立と顔面部破壊という要素の繰り返しとして理解するのである。この間の実体については、とくに具体例を当てる。さらに成形法および単位文様の共有・継承・変容を見極め、釣手土器の諸類型と単位文様の共有継承関係を辿りながら、後期初頭まで継承されたことを指摘する。また、釣手土器の出土状況について住居、土坑、遺構外に大別し、住居内においては床面・覆土という垂直位置と平面位置および他遺物との共伴関係についても地域性を見出している。こうした事実立脚して、中期に於ける釣手土器出現・展開の時間的変遷をⅠ期多様性の時代、Ⅱ期統一の時代、Ⅲ期地域色の時代と区別し、カテゴリ認識の変化をみる。とくに顔面付土器との対照的なあり方を通して釣手土器の物語性と普遍性を浮き彫りにしている。このⅠ期からⅢ期までの過程において、松本平を中心とした西側と諏訪・山梨を中心とする東側との間に地域差が認められる事実は、ひとり釣手土器だけの問題ではなく、勝坂式から唐草文系と曾利式の分化、および郷土式・連弧文・串田新式・神明式などの地域の土器様式全体の動向と関わるものであることを重視する。また土偶についても山梨の坂上型

と、それぞれの地域の深鉢文様をとり込む松本平の大村塚田型・伊那の大明神型という性格の違いにも密接にかかわると解釈する。こうした諸事実を背景として、釣手土器のカテゴリの成立について、先行する顔面把手のカテゴリ認識を継承しながら、地域を越えた普遍的な認識・取り扱いと各地域独自の認識・取り扱いの双方が時期を追って継承するとともに変容を遂げてきたことを見てとるのである。

第5章土器副葬と土器被覆葬は、縄文時代後期の近接する2地域における土器カテゴリ認識の共有・対立の問題に焦点を絞り、検討する。つまり、同じ土器を持ち、同じ儀礼に用いること（カテゴリ認識の共有）は容易に想定される一方で、同じ土器を持ちながら儀礼での使い方が異なる場合（カテゴリ認識の相違）も認められる現象を踏まえ、後期前半の関東から中部一帯における完形・略完形土器の墓域出土例を検討する。つまり、中部高地と関東西南部ではカテゴリの共有が認められる時期と相違する時期があり、後者の場合は、単なる違いというよりも意図的な対比の対立の結果と判断するのである。結論として、地域・儀礼・土器の3者の関係性とその変化において称名寺式期から堀之内2式中段階までは、土器副葬が関東・土器被覆葬が中部高地という傾向を示しながら、副葬と深鉢・注口土器、被覆葬と小仙塚類型鉢という両地域での共有関係が認められるのに対し、堀之内2式新段階から加曽利B1式期には、関東西部の注口土器・鉢を用いる土器副葬と中部高地の浅鉢を用いる土器被覆葬との対比が際立つ事実を明らかにしている。

第6章縄文土器にみる異質な二者の統合志向は、土器に表現された

象徴性を異質な二者の対置とその中和志向を軸に検討する。つまり、同一土器中の異質な要素の「共存」を、その要素を表象する要素を「除去」することで異なった二者を象徴する二個体を対置させる「結合」という3種類の表現に特殊な力（リミナリティ）への志向を見出す。続く第7章土器と石棒の対置では、土器と大形石棒との対置例に着目し、異質な二者の対置表現が土器だけに認められるものではないことを示す。

終章では、これまでの議論を改めて要約した上で、歴史的脈絡への位置づけを図る。

このように、本論文は、儀礼行為に用いられた特殊な土器形式の存在や時期を越えて表現される象徴性、集落規模と形式分化・儀礼利用との相関性を検討し、世界の土器文化の中に縄文土器の主体性を明らかにしようとするものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「縄文人は縄文土器をどのように認識していたか」について検討するものである。

序章で、研究の目的を明示し、従来の研究の主流からはずされがちであった土器の象徴性の問題が、縄文土器の多様な意味ひいては世界の土器の中における独自性ならびに文化的・社会的な主体性理解に極めて重要であることを指摘する。ここに研究の妥当性ならびに優れた独自性が良く示されている。

土器は容器という実用性が第一義的機能である。それ故考古学はその容器としての形態の分析に集中して来たのである。しかしながら、それだけでは、土器が保有する文化的社会的意味の全体を理解することはできない。むしろ道具としての機能・用途に加えて、土器のみにとどまらず、共に存在する多様な事物との関係性の中に土器の存在と主体性の意義が認められるのである。その本質に接近する方法として、縄文土器に対するカテゴリ認識に真正面から取り組み、従来の研究にはみられない模範的な成績を示している。

まず、研究の前提として、これまでの研究の歴史を丁寧に検討し、とくにカテゴリ認識の視点に的を絞って評価することによって、単なる過去の成果を溯上するにとどまることなく、具体的な問題点を浮き彫りにして、さらなる地平を見据えた展望となっており、論考の核心を自ら明らかにしている。具体例として、「第一の道具、第二の道具」、「土器情報の伝播と心の問題」、「土器製作における認知活動」、「伝統の尊重・清浄性の強化・形状の形式化」、「男／女、人間界／自然界などの象徴観念、二項対立」、「文様の螺旋構造」、「祭祀儀礼にかかわる土器形式」などの研究を正当に位置付け、さらにデュルケイムとモース、エルツ、レヴィ＝ストロース、リーチ、ターナーなど構造人類学、象徴人類学についても視野に入れ、研究の幅を広げ、狭い意味での考古学的方法の枠を越えようとするたしかな姿勢が認められ高く評価される。

それらの中からとくに本論の主要なテーマの一つとして土器の儀礼的要素に焦点を当てる。生活のあらゆる場面に存在しているカテゴリ

認識について、異なる次元の複数の属性との間に認められる結びつきのパターンの抽出、つまり技術・技法や装飾、使用痕や破壊行為、住居や墓坑など出土状況にかかわる諸属性間の結びつきからカテゴリ認識の復元に接近する方法を導き出す。土器が扱われる場における儀礼自体の定式化とその反復の性質が重要であると主張するのは妥当である。そのことが、本論における土器の象徴性とカテゴリ認識議論の道筋につながることを約束しているのである。実際の検討は、製作時に付与される要素、使用～廃棄の過程に土器自体に付与される要素としての底部穿孔・加撃・部分の剥ぎ取り・打ち欠き、出土状況から付与される要素を対象としてカテゴリ認識にかかわる諸属性の結びつきを分析することによって、カテゴリ認識の内容が解き明かされてゆく、その方法と論法はみごとである。

かくして、縄文土器のカテゴリ認識の形成・定着過程を葬送儀礼および廃棄儀礼において具体的に明らかにするのである。その研究の前提に、縄文土器の形式・型式・様式概念を整理し、とくにカテゴリ認識が形式（器形・器種）にかかわるものであることを示す。形式の機能・用途が日常的な使用を超えて文化的・社会的な意味象徴性を有する理屈を導き出すのである。そして特定の土器形式が儀礼の場面における問題について、中期において形式のバラエティが増えるのは、儀礼への利用の活発あるいは増加と関係するとする主張には説得力がある。また葬送儀礼における墓坑から出土する副葬・被覆葬土器にみられるそれぞれ異なる二者に選択され、用いられる土器形式は、全て飲食具である特性を見出しているのは重要である。一方、住居廃絶儀礼

においては釣手土器や異形台付土器などの非飲食具を含むことと際立った対照性を示す。まさに両者の儀礼行為の独立性と主体性がよく現われている。第Ⅱ部では、その実際を、儀礼行為に用いられる特定の土器形式即ち土器のカテゴリ認識の典型例としての前期浅鉢および中期の釣手土器を検討するのである。浅鉢は縄文文化の画期に新たに現われる歴史的現象であり、墓坑と住居廃絶の儀礼行為に関係して出現することを明らかにする。また、釣手土器は先行する顔面把手の特徴的な装飾と顔面打ち欠き行為を引き継いで登場するものであり、分布域が極めて狭いにも関わらず時期を追うに従って地域性の差異をみとめる。さらに、後期においては、中部—被覆葬—浅鉢、関東西南部—副葬—注口土器・鉢という3重の対比関係を、両地域の集団の意図的な所産とみるのである。こうした儀礼行為における土器の扱いの共通性と差異の具体的な指摘こそ、本論文の最も重要な核心であり、高く評価される。

論者はさらにそうした地域差・時期差を超えた縄文土器の象徴性を「中性志向」という視点で議論する。つまり、「異質な二者を統合する意図」が縄文土器の製作・使用・遺棄の各段階に認められることの提示は絶えて見ることのない全く新しい問題提起であり、重要かつ高く評価されるべきものである。しかしながら、この「中性志向」という縄文人の観念を認めるには依然として検討が必要であり、今後に期待される部分が残る。

そして本論が主として土器を限定的に対象としながら、土器のカテゴリ認識を敷衍する大きな構想の中で土器以外の器物—この場合、石

棒—とのかかわりを議論する。石棒自体も、単独に存在するわけでは勿論なく、埋甕、底面倒立土器、住居址内倒置埋設土器、炉、土坑、屋外埋設土器などさまざまな要素と不即不離の関係を有するが、とくに住居床面における土器が石棒と対置する事例に、女性象徴／男性象徴という対比のほか、土／石、空洞／中実などという物質属性における対比を注目する。たしかに土器カテゴリ認識が他の器物とかかわりながらさらに“二項対立”の観念の次元においても重要な意味をもつ可能性にまで論及する点は新鮮であり、今後の展開を予想させるが、やはり依然として十分とは言い難い、さらに検討が必要とされる。つまり、異なる属性を厳然と保有する器物同志の関係性の考究は優れて高次の認識にかかわるが故に容易には解明できないのである。

そうした問題点も含め、終章では本論を総括し、ヤキモノとしての縄文土器の主体性を明らかにしようとする意欲が的確に表現されている。そして土器を用いた儀礼行為の諸例は、その盛行する時期が、いずれも住居数の増加や土器文化の隆盛に重なっていることに注目し、そうした社会的時代相として認められることを指摘する。このことこそが、土器が単なる日常性の容器や煮炊具を超えた社会的、文化的意味を有するモノであることをよく示していることを確認し、今後の研究の地平が確かに拓かれていることを主張するのであり、まさに今後のさらなる展開が十分に期待されるところである。

よって本論文提出者の中村耕作は博士（歴史学）の学位を授与される資格を有するものと認められる。

平成23年2月18日

主査 國學院大學大学院客員教授 小林 達 雄 ⑩

副査 國學院大學准教授 谷口 康 浩 ⑩

副査 早稲田大学教授 高橋 龍三郎 ⑩